九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

トマスを読む難しさと楽しさ ： 研究会のメンバーの一人として

東谷, 孝一
熊本保健科学大学保健科学部 ： 教授

https://doi.org/10.15017/7159239

出版情報：哲学論文集. 59, pp.61-82, 2023-09-30. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai
バージョン：
権利関係：

トマスを読む難しさと楽しさ

――研究会のメンバーの一人として――

東谷孝一

「単に輝きを発するよりも照明することの方がより大いなることであるごとく、単に観想するよりも観想のみのりを他者に伝える contemplata aliis tradere ことの方がより大いなることである」[1]

九州大学を定年退官されたのちも稲垣良典先生にお目にかかる機会に恵まれた私にとって、先生から頂いた数々の恩恵をふりかえるうちに、なぜか思い出されたのはトマス・アクィナスのこの言葉であった。

Ⅰ　観想に到りつくまでの道程

（1）　先生は御著『恵みの時』の序言のなかで、トマスのこの言葉を引用しつつ、観想について述べておられる。「観想 contemplatio, θεωρία とはいったい何であろうか。じつは、観想とは事物をその在るがままの姿において見ることであり、それ以上でも以下でもない。ところで「在るものを見る」という一見単純極まることは、われわれがひとたび「在る」および「見る」という言葉のもっとも充実した意味についてふりかえるとき、その測りがたい神秘でもってわれわれを圧倒する。

……事物を在るがままに、すなわちそれが見られうるものであるその限りをつくして見ること、そこにわれわれの人間としての生の熱望のすべてが向けられていることも否定できない。「真理を見ること」contemplatio veritatis、そのことのほかに人間の究極目的はありえないのであり、人間の心は在るものを、それが在ることの限りをつくして見るまでは休らうことを知らないのである。このように見てくるとき、観想はわれわれの人生において見出される一種の活動であるにとどまらず、われわれの人間としての生命そのものに属すると言えるのではないか。[2]」

先生の生涯の歩みは、この人間としての生命そのものに属する「観想」へ向けての絶えざる精進ではなかったのだろうか。学術雑誌や紀要に発表する論文は観想にかかわるよりは、むしろ観想に到りつくための労苦に満ちた道程の記録であると先生は記しておられる。おびただしい数の研究論文や著作は、観想へ向けての先生のご研鑽があらゆる困難を乗り越えて生涯遂行され続けたことを示すものである。私の知る限りでの先生の近著論文は「トマス・アクィナスの「神」認識について」『日本カトリック神学院紀要』第8号、２０１７年であり、先生はこの年に89歳を迎えられている。その前年２０１６年にも同紀要第7号に「トマス・アクィナスの聖母神学一試論」を発表されている。

『トマス・アクィナス『神学大全』』（２００９年）のあとがきには次のように記されている、（２００７年の中世哲学会での公開講演に）「『《神学大全》の挑戦』という題を掲げたが、取り扱った問題は『神学大全』の第一部と第二部からとったものであり、第三部（キリスト論）には直接にふれていない。その理由はもっぱら私の勉強不足であって、十年ほど前から翻訳の仕事のためにあらためて第三部を念入りに読み始め、トマスの議論や立場というよりはトマス自身の生の声を聞きとっているような気がして、『神学大全』をどう読むかについても新たな視界が開かれたことは確かである。しかし、トマスのキリスト論自体が、こんにちわれわれがおし進めるべき知的探求にたいしてつきつけている挑戦について明確に語る準備はまだできていない。……[3]」

ここに語られている「トマスからの挑戦」について明確に語るべく、先生は生涯研究を継続された。そのことを先の近著

論文は示している。哲学すること、すなわち知恵の探求は生涯継続するべきものであること、また、その探求は進められるに伴って喜ばしい新たな発見をわたしたちにもたらしてくれることを、先生は身をもって証された。いくつかの著書において先生はトマスの哲学・思想について《知られざる国》や《未知の国》といった表現で評しておられるが、それらの表現は、トマスのテキストを真に読み解くなかで先生が経験された困難と知的刺激に満ちた新しい発見を、遥かかなたを歩む先達からのメッセージとしてわたしたちに届けてくれていると解することができる。

（2）　先生はご自身の研究の進展について「自然法、人格、存在――ひとつの探求の軌跡」という一文で回顧されているが、そこには注目すべきことがらが記されている。

「……たしかに私はトマス入門書を数冊書き、トマス哲学を題目に掲げる論文をおそらく百近く発表し、『神学大全』の日本語訳にも長年従事してきた……しかし私は旧制高校以来、トマスに私淑し、彼の著作から学び続けたが、彼の「哲学」の「研究」と呼ぶに値するような独自の成果を挙げてはいない。[4]」

これは驚くべきことではないだろうか。なぜこのように自己評価されているのであろうか。このような評価をもたらしているものは、単に「研究」にかんして先生が設定されている「独自の成果」が満たすべき基準の高さだけではなく、先生のご研究そのものの有する一つの特質が関与しているように思われるのである。それは先生のご研究が常に新たな発見へ導く真に発展的な性質を有していたがゆえにこそ下された評価であるように感じられるのである。この発展的な軌跡の一端については先生によって次のように回顧されている。

１９７９年に出版された『人類の知的遺産 トマス・アクィナス』の「まえがき」では「この書物を書き終えたいま、私の心を強くとらえているのは、トマスは…私にとって《知られざる国》だとの感じである[5]」と記されており、先生は『人類の知的遺産トマス・アクィナス』執筆当時におけるご自分のトマス研究の状況について振り返って、「これらの感想から伝わっ

てくるのは、トマスとの真実の出会いをめざす旅の前途はまだ長いが、少なくとも頼りになる地図は手にしているとの思いである、といえよう」と記されている。[6] ここでの「頼りになる地図」とは、E・ジルソン、J・マリタンに始まり、M・グラープマン、M・D・シェニュ、C・ファブロ、K・ラーナーを経て、J・P・トレルに到る、頼りになる道連れ、卓越したトマス研究者の著作であると言われている。

ところが、その後の約10年間の研究ののち、このような前途への予想は、根底から覆されるに至ったことが記されている。このことは「この時は長年私が「トマスの旅」において頼りにしてきた地図さえも、そのままでは使えなくなった、と感じたのである」[7]と表現されている。この時から地図のない前人未到の地へと旅しなければならなくなったと言われている「この時」とは、「トマスと、オッカムによって導入された認識理論がひき起こした根源的な変革の影響の下にあるわれわれとの間には、越え難い「見えざる壁」があることに気付」[8]いた時であると言われている。

さらにこののち、「トマスの哲学についての新しい発見をめざして」ご研究は続けられたが、この研究によって次のような発見へと導かれたことが記されている。この発見について「トマスの「存在論」の中核である「存在」（エッセ）理解は、受肉 Incarnatio という信仰の神秘を、どこまでも信仰の光に導かれつつ、可能な限り知的に理解しようとする試みを通じて成立したものである、との結論に達した」と語られ、さらに「トマスの哲学を専らアリストテレス哲学および新プラトン哲学の流れのなかに位置付ける、トマスの「存在論」についての従来の解釈を見直す」[9]ことが迫られていると指摘されている。先生のご研究はこのように、既存の解釈枠において捉えられていたトマス哲学がその都度見直しを迫られ、突破していくことにおいて進められているのである。それはまるで、新しいぶどう酒は新しい革袋に入れなければならず、古い革袋に入れればそれを破ってしまうとの教えがあるように、先生のご研究によって明らかにされたトマス哲学の有する根本的な新しさが従来の哲学の枠組みのうちに位置付けられることを許さず、それらを打ち破って現れ出ているかのような印象を受ける。

このようにみるとき、先生のトマス研究における一つの特色に私たちは気付くことができるのではないだろうか。それは、

先生のトマス研究は、或る意味では先生ご自身の思いもよらない仕方で展望が開かれながら進展している点である。探求を押し進めて行けば行くほど、先生にとってトマスは未だ《知られざる国》であるとの感を深め、しかもそのような認知が既存のトマス解釈をことごとく乗り越えて、より一層、根源的テーマに遡って探求をすすめる動因となっているのである。真の探求とは、このように、探求を終結させる探求ではなく、さらなる探求へと導いてくれる探求であることを私たちは改めて知ることができる。

Ⅱ　観想の満ち溢れ

他方で、単に観想するよりもより一層大いなることであるとトマスが評した「観想のみのりを他者に伝える」ことについても、先生が果たされたご貢献は極めて大きいと私は考えている。そのような貢献の一部として、学術論文とは異なり、『神学大全』などの哲学・神学的テキストに接したことのない人たちを含めた、より広い層の読者が親しんで読むことが可能な論説や随筆的な文章があげられる。これらの論説や随筆的な文章もテーマは多岐にわたり、また数も極めて多いが、私が大きな感銘を受けるのはそれらの文章を読んだ人の多くが感じ取っているであろう或る事柄である。それらの文章は比ゆ的な表現を用いるならば、学術論文とはその放つ光の色調は異なっていても、その輝かしさにおいては学術論文に何ら引けを取ることはない。否むしろ、そこには、トマスがそれを観想よりも「より大いなること」であると評していることがまことにその通りと納得されうるような事柄がはっきりと認めうるように思われるのである。

『恵みの時』にふくまれている文章について、先生は謙遜なさって「観想のみのりのごときもの」と表現されているが、これらの文章は「観想に到りつく道程の労苦から解放されたしばしの憩いの時に生みだされたもの」と記されている。この本のタイトルについて次のように記されている、「恵みはこの文集の全体を貫く基調であり、書名としてふさわしいと考えた。

まことにわれわれの存在そのものが、究極的には賜物であり、恵みであるように、われわれが生きている時間もまたいわば恵みによって浸透されている」。「観想のみのりを他者に伝える」事例として説教や教授があげられるが、トマスによれば、それらの活動は「観想の充満から発する」ex plenitudine contemplationis derivatur 活動である。先生の長年の研究活動によってもたらされた観想は、積み重ねられることによって、言うなればそれら自身が一つの光源となり、他の人たちを照らし導く光を発するに至っているのである。観想の満ち溢れというおおきな恵みの経験のうちで綴られた先生の文章は、私たちの存在や、生きている時間についての或る vision を伝えるものであり、そのような vision を受け取ることにおいて、私たちもまたその恵みに何らか与ることができているのではないだろうか。

Ⅲ　トマス研究会

（1）「観想のみのりを他者に伝える」ことにかんするもう一つのご貢献として、大学などの教育機関での授業・演習などがあげられるが、私自身とりわけありがたかったのは、先生が長く主催されたトマス研究会に参加できたことである。

１９９２年４月25日（同年３月に先生は九州大学を定年退官された）より始められたトマス・アクィナス研究会は、コロナ禍で休会を余儀なくされる以前、２０２０年１月25日開催の会まで28年間継続された。発足当初は『神学大全』第一部第85問題から読み始めたと伺っているが、その後、第二部の読解が継続されていた。私が初めてこの回に参加したのは１９９６年10月19日の会で、第二－一部第54問題第１項が検討箇所であった。この箇所は習慣論にあたり、その後、研究会はテーマを、徳、法、恩寵へと展開させながら継続されていった。

この会に参加できたことによって、私はトマスを読むことの難しさと楽しさを多少なりとも体験することができたのであるが、この体験は私にとって何にも代えがたい財産となった。トマスを読む楽しさとして様々なことがらがあげられうるで

あろうが、私の場合は、「あくことを知らない探求精神につらぬかれている」[10]この稀有な思想家からその息吹を受け取り、自らの精神が「新しく」されるような思いを経験できることである。トマスの思想の源泉は聖書、教父やアリストテレスのみならず、ボエティウス、偽ディオニシウス、プロクロス、さらにはイスラムやユダヤ思想に及ぶ。トマスに顕著な対話的で総合的な探求姿勢は、そのまま先生の探求姿勢でもあったように感じられるが、この姿勢をわたしたちにとってのお手本とすべきではないだろうか。

他方で、トマスを読む難しさについては、先生のご教示によって初めて気づき、この点にトマスを読む一つのポイントがあるのではないかと感じている。「『神学大全』を……「百科全書」と見なし、その構成単位である２６６９個の「項」の数だけの「解答」の集成として読んだ場合には、この書物は到る所で相互に矛盾・対立する主張の巨大な塊であるかのように思われてくる」[11]。

このような矛盾・対立はテキストを単に部分的に読み、各項におけるトマスの解答を以って、当の事柄の問題は解決されたと考える限り、明確に気付かれることもないであろう。『神学大全』に伏在している矛盾・対立は、テキストを広汎かつ入念に読むことによって初めて発見され、問題として読み手に新たに見い出され意識される。この新たな問題意識のもとに読者が『神学大全』全体を読み通すとき、「さきには矛盾・対立すると見えたそれらの言明は次第に相互に結びつき、統合されて、それまで秘められていた実在あるいは真理に光をあてるものとなる」[12]と先生は語っておられる。

（2）では、トマスのテキストのうちにはどのような矛盾・対立が見られるであろうか。一つの例としてトマスにおける悪の概念についてのご指摘を見よう。「トマスにおける神学的言語としての「悪」（1）」「トマスにおける神学的言語としての「悪」（2）」[13]において先生は次のように論じておられる。

トマスにおける悪の概念として、「善の欠如」あるいは「存在（有）の欠如」という回答が一般的に与えられるが、この答

えは誤りではない。というのも、トマスは、すべての有は、それが有たる限りにおいて善であることを一貫して主張しているのであり、いかなる有も有である限りにおいては悪とはいわれず、何らかの存在を欠いている限りにおいて悪といわれると主張しているからである、と論じられている。[14]

しかしこの答えは十分なものではない、と言われている。トマスは人間の罪や悪徳と呼ばれる悪について考察するさいに、それをたんに「善の不在」として捉えることで事足りるとしてはいないからである。罪や悪徳といった悪は、病気や死、様々の害悪や苦痛といった悪よりもより悪の本質をふくむものとされているが、それらはあくまで人間が自由につくりだすものとして考察されるのであって、たんに善の欠如ないし有の欠如として説明されるのではない、と指摘されている。[15]

このようにして、トマスにおいて二つの「悪」の理解があることが指摘されている。すなわち、一つは善ないし有の欠如としての悪であり、この理解において悪は最終的には虚無に通じるものとして、否定的ないし欠如的に捉えられている。他方は、罪科ないし罪・苦痛としての悪であり、この理解においては、多様な、それ自体の因果性を行使するものとして、積極的ないし動的に捉えられている。これらの二つの理解にはへだたり、ないし一種の対立があることが見て取られうるとされる。[16]

悪を善の不在・欠如として捉えることは、「存在するものは存在するかぎりにおいて善いものである」という「存在」理解を裏から言いかえたものであるが、このような「存在」理解はわたしたちの日常経験の基準枠（レベル）あるいは自明の前提ではない。日常経験の次元においても、倫理的実践の領域においても、様々の「悪」と呼ばれ、「悪」として受け取られているものごとを単に善の欠如として理解し、説明することはできない。[17] このような「存在」理解はすべて存在するものは唯一の真に存在するもの、ないし存在そのものから存在を与えられることによって、つまり創造されることによって存在するという創造の形而上学にもとづいている。[18] したがって、「善ないし存在の欠如として悪」とは、神論ないし創造論的視点から捉えられた悪であり、『神学大全』第一部において主要に論じられている。

他方で、人間の罪や悪徳と呼ばれる悪については、『神学大全』第二部にもとづいて、人間論ないし倫理学的視点から捉えられており、「反秩序的な人間的行為（罪）としての悪」が考察されている。トマスはここでは、悪を悪たらしめる本質側面そのもの（ipsa ratio mali）ではなく、もっぱら罪とされるところの行為、つまり或る意味で人間の意志を第一動者（primum movens）とするところの自由な行為に目を向けて、罪の原因（causa）の考察を通じて、罪とは何であるかを探求しているとされる。[19]

以上の二つの「悪」の理解にかんして、いずれか一方を他方へと還元しようとする試みが可能であり、じっさいにこれまでそのような試みが様々になされてきたと指摘されているが、しかし、トマスが試みたのは二つの理解を『神学大全』第三部のキリスト論的言語において統合し、統一することであったと記されている。[20]

（3）では、以上の二つの「悪」の理解について、キリスト論的考察はなぜそれらを統一的な理論・実践的視点から捉えることが可能なのか。この問題にかんして、次のように述べられている。キリストは真の神であるとともに、真の人であるから、神的観点から捉えられる悪と、人間的観点から捉えられる悪とは何らかの仕方で統合されているのではないか。キリストは神であるかぎり、一方では神として悪の本質を完全に見てとり、他方では、神と完全に合一している人間として、それが人間としての完全性を意味するかぎり、人間として最も完全な仕方で悪に直面し、うち勝っていたと考えられる、と。[21]

「悪」についてのキリスト論的考察がもたらすものとして、悪の本質の把握と悪の克服という2点が語られているが、それら（とりわけ前者）にかかわることとして、注目されるのは先生の次のことばである。「悪の問題は自由という問題を介して、人間の（自然）本性ないし本質の問題と密接かつ根源的に結びついているが、われわれは自分自身とは何であるかについて、いいかえると、人間とは何であるかについて致命的ともいえるほど無知であり、この無知から癒されるためには実はキリスト論の助けをかりることがどうしても必要なのである」。[22]「すべての人間が被っている人間本性の歪みないし損壊から

完全に自由であると考えられるキリストの目に映った悪とは何であるかを探求することによって、悪についての真の全体的な洞察へと近づくことができるのではないか。[23]」

これらの言葉が示しているのは、「悪」をめぐって私たち自身が置かれている状況であり、ソクラテス的用語で表現するならば「悪についての不知の不知」「悪とは何であるのか、知らないのに知っていると思っている」状況であるように思われる。すなわち、「悪」と呼ばれていることがらは、病気や死、様々の害悪や苦痛といった悪にしても、また罪や悪徳といった悪にしても、わたしたちにとってあまりにも身近で頻繁に経験していることがらであるがゆえに、それがどのようなことであるかは改めて問う必要もないほど自明的であるように思われているが、しかし実際はそうではなく、「悪」についての正しい理解からは程遠いところを彷徨っていると言うべきなのかもしれないのである。

このような「悪」についての「不知の不知」という私たちの状況について注意を喚起する先生のご指摘は、この二つの論考の至る所に非常に強い印象を伴って見いだされるものである。

「悪はそれ自体「もの」ではなく、中立的・客観的な態度で観察し、情報を集めることによって、それについての正しい理解が得られるようなものではない。欠如としての悪は、根本的にいって、悪を理解しようと試みる我々自身のうちに見出されるのであり、そのことはわれわれのうちに悪にたいする一種の無知ないし盲目をつくりだしている、といわざるをえない。[24]」

「倫理的悪・罪は自然本性に反するものであり、われわれの倫理的世界の秩序は根本的に転倒されているとしなければならない。われわれはほとんどの場合それが如何にして起こったのかを根本的に問うこともなく倫理的悪について論じているが、それは重大な見落としにもとづくといわざるをえない。この見落としは、われわれは実のところ、倫理的悪・罪について根本的に無知であり、倫理的悪・罪の本質を見てとるための視点を喪失している、と言いかえることができるであろう。[25]」

以上のような先生の言葉が示唆していることは、悪についての探求に正しく向かっているためには、私たち自身がまず照明され、無知から癒されることが必要だということではないだろうか。「悪」と呼ばれる事態は確かに私たちの身の回りで絶

えずみいだされることがらであっても、そのことは私たちが「悪」についての正しい理解を持っていることを何ら保証するものではないと言わなければならない。キリスト論的考察はこのような状況のもとに置かれている私たちの照明のためになくてはならず、私たちはその考察を通じて回心へと導かれるのかもしれない。

「神的本性と完全に合一しているキリストの人間本性はあらゆる身体的弱さや欠陥から解放され、いわば栄光の輝きにつつまれているはずである、というわれわれの予想に反する仕方で[26]」キリストは「肉体的な弱さないし欠落、感覚的な苦痛、その意味での死を免れて[27]」はいなかったが、トマスはこのことを神の御子にとって適わしい（conveniens）ことと見なしている。というのも、これらの悪はトマスによれば「受肉の目的、すなわち人類の罪にたいする罰のつぐないとして、それらを耐え忍ぶという目的にもとづくものであった[28]」とされる。他方で、トマスはキリストにおいて罪という欠落が見出されるべきではなかったと主張し、この主張を「キリストはなぜ前述の諸々の欠落・悪を被ったのかという理由と全く同じ」理由にもとづいて示しているとされる。すなわち、キリストは人間の罪を償うため、みずからの人間本性が真なるものであることを確証するため、われわれに徳の模範を示すために罪を犯すことはなかったとされる[29]。

ところで、人間の罪を償うこと、それはまさしく神の愛の御業に他ならない。「キリストが彼の人間としての生において神と完全に合一し、すべての人間をふくむ共同体の頭であったのは愛によってであったが、その愛によって彼は悪を引き受け、また悪をほろぼすために自らを犠牲として捧げた[30]」と論じられている。さらに、「そのかぎりで、キリストはこの愛にもとづいて悪を捉えていたともいえるであろう」と指摘されている。そうであるならば、キリストにおいてはその愛こそが悪を悪として何らか照らし出していると言いうるのかもしれない。「真に罪を知っていたのは「罪を知らない」キリストのみであった、ともいえるのである[31]」とのご指摘もなされている。悪はわたしたちの把握を容易に許すことのない神秘であるのかもしれない。しかし、その神秘に私たちが何らか触れることができるのは、キリストによって示された神の愛という神秘中の神秘に私たちが触れるときであるという、まことにパラドクシカルなことがらがここでは示されているように思われる。

Ⅳ 『神学大全』の翻訳完成

（1） 先生のお仕事を振り返るとき、すでに先生ご自身も含めて他の様々な方も様々な機会に述べておられることではあるが、トマスの主著『神学大全』Summa Theologiae の翻訳について触れないでおくことはできないように思う。『神学大全』の翻訳は、先生が最も情熱と愛情を傾けて行われたお仕事の一つであると思われるからである。

『神学大全』の全訳が完成し出版されたことは、日本における哲学研究にとって「まことに意義深い画期的な偉業である」[32]のみならず、およそヨーロッパの思想・文化を根底から理解したいと願うすべての人にとってこの上ない朗報であることは疑うことができない。トマスの円熟した思想は『神学大全』においてこそ、もっとも包括的な仕方で表現されていると評価されているからである[33]。

『神学大全』創文社の日本語訳は、１９６０年5月に第1分冊が発行されることで刊行を開始した。最終を飾る第39・40分冊の訳業を先生が終えられたのは２０１２年5月であり、同年9月に刊行され全巻完結に至っている。刊行そのものに52年を要しているが、第1分冊が発行される「十数年前から企画が着手されていたとのことであり、実に70年近くの歳月が費やされた[34]」ことになる。完成に至るまでには様々な紆余曲折があったことは想像に難くなく、翻訳にかかわった諸先生方には大きなご苦労があったことと推察される。１９６０年当時の計画としては、第一部 Pars Prima 8分冊、第二－一部 Prima Secundae 6分冊、第二－二部 Secunda Secundae 10分冊、第三部 Pars Tertia は補遺 Supplementum を含めて12分冊からなる全36分冊をもって完結が予定されていたが[35]、様々な経緯を経て完成されたものは、第一部、第二－一部、第二－二部にかんしては予定通りの構成である一方、第三部については補遺 Supplementum を除いた21分冊からなり、全45分冊の構成となっている。

この翻訳事業が開始された当初は、１９６０年に第1分冊が出版された後、1年ごとに次々と全巻を出版する予定であったようである。当時の全巻責任者であった高田三郎教授から先生が直接伺ったこととして、次のように記されている。「先生はこの翻訳をまずご自分が指導・育成された六人の研究者たちと共に始め、次にこれら六人の研究者たちがそれぞれ数名の研究者を育てて仕事を続行すれば10年か、そこらのうちに翻訳は完成するはずだ、という目論見だったようである[36]」。しかし、この目論見ははずれることになった。１９７２年に第一部の出版が終了した後は、数年にわたって出版は中断され、高田三郎教授をはじめ、翻訳分担者の間でもおそらくこの企画は完成しないだろうとの悲観的な空気が強まっていたとのことである[37]。このような計算外れがなければ、『神学大全』を翻訳する機会は訪れなかったもしれない、と先生は述懐しておられる[38]。

高田先生が『神学大全』の翻訳にあたって厳守された方法があったという。それは、翻訳分担者全員が演習形式でテキストを入念に読んで、あらかじめ指名された翻訳担当者が訳稿を作り、出版社から送ってきた校正刷りをまた全員が演習形式で点検し、真っ赤に朱を入れて出版社に戻す。これを何度も繰り返して初めて訳了となる方法であった。この行程を長年にわたって継続することは極めて困難であり、高田先生から先生が翻訳事業に参加を呼びかけられた時、高田先生ご自身がこの方法に見切りをつけておられていたようであったと言われている[39]。

（2）先生が『神学大全』の翻訳に最初に参加されたのは、１９７７年に出版された第13分冊である。この時点で、残された巻の翻訳分担はすべて決まっているとのことであり、第13分冊をもって先生はご自分の翻訳のお仕事は終了すると考えておられた[40]。ところが、この予想は大いに外れることになった。最終的に先生が翻訳をご担当されたのは、第二－一部の全6分冊中4分冊、第二－二部の10分冊中6分冊（そのうち1冊は片山寛教授と共訳）、第三部の全21分冊中17分冊であり、合わせて27分冊となり、全体の45分冊数の半分以上を占めている。

この一大事業の完成において先生が果たされた貢献は、単にご担当され訳出されたテキストの量の膨大さというだけで尽くすことのできない、極めて大きなものだったのではないかと私は考えている。先生は訳者を代表して、創文社とともに第67回毎日出版文化賞を授与された。

『神学大全』の翻訳が完成に至るまでに、少なくとも2つの転機があったようである。一つは第9分冊を巡ってのことである。『神学大全』第二部冒頭に位置し、人間の究極目的（幸福）についての考察を含んでいる第9分冊は、高田先生の門下生である村上武子修道女が翻訳を担当し、高田先生ご自身も彫琢を加えられて、長年、作業を進めてこられていたという。ところが、１９９２年に村上修道女は急逝し、高田先生はその後も訳稿を手元に置かれていたため、１９９３年になっても出版の目途が立たないままとなっていた。出版の停滞に危機感を抱いた創文社の久保井社長から、直談判をしてほしいとの依頼が先生に行なわれて、今後の翻訳の進め方について京都で会議が開かれるにことになった。高田先生と先生、高田門下生の方々4名、久保井社長、編集の小山氏が集まった場での話し合いの結果、第9分冊の翻訳は出版に向けて大きな進展をみたとのことであるが、先生はこの会議で重要な役割を果たされている。[41] 翌１９９４年、高田先生はこの巻の出版を見届けることなく逝去され、さらに2年かけて１９９６年に第9分冊は出版されている。

もう一つの転機は第三部の翻訳をめぐってである。２００１年に第二－二部の第23分冊が刊行され、当時先生が引き受けておられた巻の翻訳は終わっていた。キリスト論、秘跡論を含む第三部については山田晶先生が独自の構想で全訳の計画を立てておられたという。山田先生は「読者の理解を助けるために詳細な「註釈」ともいえる訳注を付して訳出する計画をたてておられ」[42]、第三部第12問題までが訳出され刊行されていたが、第三部全体の完訳までにはあと30年はかかる見通しであったという。[43] そこで出版社の希望もあり、２００２年に第60問題以降の秘跡論については、山田先生から先生へと訳業はバトンタッチされるにことになった。さらに２００４年には山田先生が事故のため健康を大きく害され、第16問題以降のキリスト論も先生が担当するようにとの依頼をうけるに至っている。１９７７年に出版された第13分冊をご担当されて以来、２０

11年秋に第三部の翻訳業を完了されるまで30数年間、先生は毎日の日課として翻訳を続けられた。この日課が哲学研究の他の仕事の妨げになると感じられたことは一度もなく、かえってこの日課が「生活に秩序と安らぎを齎してくれたことを感謝している」と述べておられる。[44]

（3）先生が訳業を完成され、最後に刊行された第39・40分冊の「まえがき」において、次のように述べられている。

「『神学大全』の第三部を訳している間に次第に強まってきたのは、「神学者」トマスの明晰、冷静で「非個人的」とまで評される学者的な語り方をつきぬけて、われらの救いのために人となられた神という受肉の神秘にたいして何よりも自らを全面的に開こうとする「キリスト信者」、そしてこの信仰の理解が進むにつれて燃えあがる神への愛に自らを捧げようとする「修道者」トマスの声が響いてくるような経験であった。私の拙い訳文を通して読者がこの経験を共有して下さることを心から願っている。[45]」

ここに語られている経験、それこそが、先生が『神学大全』翻訳の仕事から学んだ最大のことであると明言されているのである。[46]私はここに語られている証言は、これからトマスのテキストを読み、トマスから学ぼうとするすべての人たちにとってこの上ない導きになり、励ましになるのではないかと思う。というのも、ここには信仰の導きのもとに自らを探求に捧げたトマスという「キリスト信者」と、トマス研究にご自身の生涯をささげられた先生との或る稀有な出会いがあったことが証言されていると思われるからである。

ところで他方で、トマスの仕事にたいしては、これまで疑問あるいは批判がくりかえし投げかけられてきたのであり、その代表として西田幾多郎博士の言が挙げられている。[47]

「トマスの思想というのは、実に明晰な、全体がよく調った、大きな、美しい体系のようである。何となくラファエルの画の如くにも思われるのである。併し私は何だか心の底から動かされると云う様に思われない。非常な深さとか高さとか云う

ものがない様である。私はやはりアウグスティヌスが中世第一の偉大な思想家であると思う。[48]」

このような評価の背景には、トマスが哲学的総合にあたって宗教的なものを犠牲にしたという懸念が西田博士にあったようだと指摘されている。[49] トマスに対する同様の批判は今日も行われており、トマスが行なったとされる信仰と理性の総合は、『神学大全』の基本構想に関して言えば、信仰のギリシア哲学への還元、キリスト教のヘレニズム化ではないかと批判されている。[50] さらに、トマス自身の時代においても、ボナヴェントゥラはトマスを批判して、「トマスが神学において信仰の解明や理解のために哲学的議論を導入しているのは、神の知恵という葡萄酒を哲学的議論の水へと変じさせてしまう極悪の奇跡」であると論じている。[51]

このような印象は、先に述べた如く、『神学大全』をそこに含まれている２６６９個の問いと同じ数の「解答」の集積として読むかぎり、おそらく誰もが抱く印象であろうと言われている。[52] だが、『神学大全』を「一冊の書物として著者の意図を汲み取りながら読む[53]」と全く別の姿が浮かび上がるのであり、その姿を印象深く集約的に示しているのが、第39・40分冊の「まえがき」の言葉なのである。

（4）『神学大全』翻訳の仕事から学んだ最大のことであると先生が明言されている経験、その経験が証していることは、大方のトマス批判が意味するところとは全く反対に、『神学大全』を読むことによって私たちもまた、神への愛に自らを捧げつくす「キリスト信者・修道者トマス」の声をはっきりと聞き取ることができることである。この経験の共有こそが先生の願望であった。しかし、なぜ、このような経験の共有が可能なのか。それは次の言葉によって示されている、「『神学大全』の著者であるトマスにおいては、「神学者」であることと「修道者」すなわちひたすら「キリストに従って生きる者」であることは内面的に結びついていた[54]」。これは極めて重要な指摘ではないだろうか。というのも、「神学者」であることと「キリストに従って生きる者」すなわち「キリスト信者」であることが内的に結びついているのならば、それはトマスにおいて信仰

と理性が或る注目すべき仕方で内的に結びついていることを示唆しているように思われるからである。

トマスの神学的探求の特徴について、「神学」と「霊性」が一体化していること、「主知主義」と「神秘主義」が統合され、一体となっていることなどと表現されている。すなわち、「トマスの「主知主義」と言われるもの、行き過ぎとも思えるほどの神学的探求の徹底性の根底にあるのは、信仰を通じてわれわれに親しく現存する神への愛であり、その意味での「神秘主義」だ」と語られている。[55] ところで、「主知主義」と「神秘主義」という一見したところでは相互に緊張関係にあり、統一はおろか両立することも困難であるように見える二つの要素が統合され、一体となることは如何にして可能であったのか。

このことにかんして、あくまでも一つの仮設に過ぎないと断わったうえで、先生は次のように述べておられる。「トマスは一貫して「知解を求める信仰」fides quaerens intellectum という神学的探求の本質に忠実であった、という或る意味では単純極まることがそれを可能にした」と。[56] さらに続けて次のように語られている、「信仰が知解を求めるということは、信仰はあくまで信仰であり続けつつ知解を求めるということであって、信仰が自らを知識へと変容させる se transformans のでもなければ、知識へと移行する transiens のでもない。そうではなく、信仰はまさしく自らを信仰として完成するために知解を求めるのであって、知解が進むのに応じて信仰が後退したり、無用になるのではない」と。[57]

信仰は自らを信仰として完成させるために知解することを求めて探求に向かう。そうであるならば、「修道者」「キリスト信者」トマスにとって、彼の神学的探求の一切は信仰そのものに発する内的な促しにもとづく営みであったのであり、そのような探求がもたらす知解がその信仰をより一層すぐれたものへと完成させていたと理解できるのかもしれない。

ところで、トマスによれば、信仰には不完全な信仰 fides informis と完全な信仰 fides formata があり、前者は信仰の形相である愛徳 caritas を欠いている信仰であり、後者は愛徳によって形相づけられ完成されている徳としての信仰である。[58] 従って知解によって信仰が完成されるとき、愛徳がより大いなるものとなり、人が精神の愛によってより一層神に近づき、神と合一されると解されうる。[59] トマスによれば、愛徳は対神徳のうちでも、最高度に神に達するがゆえに最も優れているとされる。

というのも、自らによるper seものの方が、他のものによるper aliudものよりも常により大いなるものであるが、信仰および希望が神に達するのは、神からわれわれに真理の認識あるいは善の獲得がもたらされるかぎりにおいてであるのに対して、愛徳は神のうちにとどまるsistereような仕方で神御自身に達するからであると言われているのである。[60]

このようなことがらにもとづいて、先生はトマスにおける「神学」と「霊性」の一体化、「主知主義」と「神秘主義」の統合について次のように指摘されている。

「信仰が知解を求めるのは、そのことによって愛がより大いなるものとなり、神とより親しく結びつくためだ、というのが「知解を求める信仰」についてのトマスの理解であった。したがって、トマスの場合、神学的探求の徹底的な遂行は、それが信仰を「徳」として完成するものであったかぎり、彼の「神秘主義」ないし「霊性」といささかも衝突したり、それを弱めたりすることはなく、むしろそれを深めるものだったのである。[61]」

トマスにおいては信仰と理性はけっして衝突したり、他を排除したりすることはなかった。むしろ真実のところは、ことがらは反対であって、トマスにとって信じることと知ることは、相互をより一層完成させ合うような仕方で統合されていたのではないか。このことを先生の言葉は示しているように思われる。

（5）愛徳によって形相づけられた信仰、徳として完成された信仰について、先生は次のような注目すべきことがらを述べておられる。

「この意味での信仰は永遠の生命に近づくための道であるというだけではなく、それ自身がすでに生命である。トマスは信仰を「永遠的生命の端初」inchoatio vitae aeternaeと定義するが、これは言葉の飾りではない。信仰は世界観やイデオロギーではなく、それ自身がすでに生命である。どうしてこのように思いきったことがいえるのか。それは、信仰が神の恵みであることからの直接の結論である。すなわち、神が恵みgratiaとして与えるのは神自身であり、その生命にほかならない。し

たがって、恵みとしての信仰を受けいれることは、そのまま神の生命に参与することであり、その意味で信仰は生命なのである。[62]」

人間の究極的で主要な善は、神において憩い・悦ぶこと fruitio Dei であり、そして人間はこのことへと愛徳によって秩序づけられているとトマスは言う。神の恵みとしての信仰に与りながら、神において憩い・悦ぶことという人間の究極目的に向けて、トマスはひたすら探求の道を歩み続けたといえよう。『神学大全』に学ぶことを通じて、この「修道者」「キリスト信者」トマスの声を聴き取ること、これが私たちに先生が願っておられることであると思う。

註

（1）*Summa Theologiae*（以下 *S.T.*）, II-II, 188, 6
（2）『恵みの時』創文社、１９８８年、ii-iii
（3）『トマス・アクィナス『神学大全』』講談社、２００９年、p.191
（4）「自然法、人格、存在――ひとつの探求の軌跡」西日本哲学会編『哲学の挑戦』、春風社、２０１２年、p.356
（5）『人類の知的遺産トマス・アクィナス』講談社、１９７９年、p.3
（6）前掲論文「自然法、人格、存在――ひとつの探求の軌跡」、pp.357-8
（7）前掲論文、p.358
（8）前掲論文、p.358
（9）前掲論文、pp.358-9
（10）前掲『人類の知的遺産トマス・アクィナス』、p18
（11）『トマス・アクィナスの神学』創文社、２０１３年、vii

(12) 前掲書、viii-ix
(13)『神学的言語の研究』創文社、２０００年、第６、７章
(14) 前掲書、p.137
(15) 前掲書、pp.137-8
(16) 前掲書、p.141
(17) 前掲書、p.142
(18) 前掲書、p.143
(19) 前掲書、p.153
(20) 前掲書、p.141
(21) 前掲書、pp.169-70
(22) 前掲書、p.170
(23) 前掲書、pp.173-4
(24) 前掲書、pp.147-8
(25) 前掲書、p.152
(26) 前掲書、p.176
(27) 前掲書、p.175
(28) 前掲書、p.176
(29) 前掲書、p.179
(30) 前掲書、p.140
(31) 前掲書、p.181
(32) 八巻和彦「トマス・アクィナス『神学大全』の翻訳完成を祝して」中世哲学会編、『中世思想研究』55、２０１３年、p.1
(33) 前掲『人類の知的遺産トマス・アクィナス』、p.47

(34) 八巻和彦、前掲論文、p.1
(35) 『神学大全』第1分冊、創文社、１９６０年、邦訳序文
(36) 「『神学大全』翻訳から学んだこと」『中世思想研究』55、２０１３年、p.5
(37) 「『神学大全』を読み始めた頃」アウグスティヌス研究会編 *Vestigia Cordis* 第3号、２０１３年、p.13
(38) 前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.5
(39) 前掲論文「『神学大全』を読み始めた頃」、p.13
(40) 前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.6
(41) 前掲論文「『神学大全』を読み始めた頃」、p.14、前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、pp.9-10
(42) 前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.10
(43) 片山寛「『神学大全』の完訳によせて」『中世思想研究』55、２０１３年、p.23
(44) 前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.6
(45) 『神学大全』第39・40分冊、創文社、２０１２年、vii
(46) 前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、pp.6-7, p.10
(47) 前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.7、前掲『人類の知的遺産トマス・アクィナス』pp.12-13
(48) 「続思索と体験」以後、『西田幾多郎全集』第12巻、岩波書店、１９５０年、p.205
(49) 前掲『人類の知的遺産トマス・アクィナス』p13、「トマスの如きに至って、中世哲学は円熟の極に達したのかも知れないが、それは真に宗教的なるものを犠牲にしたという感なきを得ない。」「哲学論文集 第五」『西田幾多郎全集』第10巻、岩波書店、１９５０年、p.461
(50) 『トマス・アクィナス』勁草書房、１９７９年、p.53
(51) 前掲書、p.53
(52) 前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.7
(53) 前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.11

（54）前掲『トマス・アクィナスの神学』vi

（55）前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.11

（56）前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.11

（57）前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.11

（58）*S.T.*, Ⅱ-Ⅱ, 4, 3、ちなみに、愛徳はすべての徳にとっての形相であるかぎりにおいて、それはすべての徳の母であり、根元であるとトマスは主張する。*S.T.*, Ⅱ-Ⅰ, 62, 4 さらに、愛徳なしには端的に真実なる徳はありえないとも主張されている。*S.T.*, Ⅱ-Ⅱ, 23, 7

（59）*S.T.*, Ⅱ-Ⅱ, 24, 4

（60）*S.T.*, Ⅱ-Ⅱ, 23, 6

（61）前掲論文「『神学大全』翻訳から学んだこと」、p.12

（62）『信仰と理性』第三文明社、１９７９年、pp.129-30

（熊本保健科学大学保健科学部・教授）